

満願寺城跡の発掘調査について

岡崎 雄二郎

1. 調査に至る経緯

昭和54年9月20日、島根県警察本部から松江市西浜佐陀町内において計画する拳銃射撃場及び警察学校用地造成工事の予定地における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。遺跡分布図などで調べたところ、用地内には中世末に所在した「満願寺城跡」の一部が該当する可能性が生じた。

そこで、翌21日に現地踏査したところ、谷間の低地は既に埋められており、以前の地形が分からなかったが、2か所の山稜にはいずれも尾根上に平坦地があり、斜面には多数の加工段が確認できたので、満願寺背後の山稜から連続する「満願寺城跡」の一部と認められた。

同年10月11日付けで、島根県警察本部長波多秀夫名で松江市教育委員会社会教育課長宛、当該城跡の発掘調査の依頼があった。発掘調査は、試掘調査とし、社会教育課文化係主事（当時）の岡崎雄二郎が担当し、昭和54年11月7日から同年11月15日までの9日間実施した。

拳銃射撃場予定地をA地区、警察学校予定地をB地区として、それぞれ山の尾根に並行又は直交する幅1mのトレンチを山裾まで設定し、手掘りにより地山面まで掘下げた。

なお、満願寺城は、『雲陽誌』^(注1)の秋鹿郡、七釜大明神の項によれば、「…此宮山は古湯原^{いにしえ}弾正^{だんじょう}忠元^{ちゅうげん}綱といふ人近郷五六ヶ村領し斯宮を要害としたり今に其古跡あり…」と記される戦国時代の古城跡である。

2. 調査の概要

一部表土が流出し地山面が露出した箇所（A地区尾根突端部）もあったが、全体としては尾根上平坦地で約10～20cm、斜面においては20～40cmほどの厚みで褐色土層が堆積していた。地山面は新生代第三紀に形成された軟砂岩層（松江層）である。

A地区

尾根平坦部は、東側最上段が約10m四方の平坦地となり、第2段目は、その西側尾根上を崖まで長さ30m余り、幅10～15mの平坦地を形成している。斜面に認められる加工段は、宍道湖側で5段以上、北側に6段以上、西側は尾根から急傾斜で崩壊しており、原形は把握できないが、下方において2～3段の加工段が認められ、さらに西へ突出する丘陵へと連続している。

北側トレンチの第2段目において地山に深く食い込むピットが4本認められたが、これは柵列の一部と思われる。（実測図なく位置不明、写真参照）又、同トレンチの最下段ではこぶし大の丸みのある小礫が6個採集されたが、これは投石用のつぶて石と思われる。（実測図なく位置不明、写真参照）

B地区

尾根平坦部は、北側において最上段が長さ10mばかり遺存し、北部は崖により消失している。第2段目は、長さ10m、幅15mの平坦地である。第3段目は、南部尾根突端部まで長さ35m、幅11mの細長い平坦地を形成する。第2段目、第3段目ともに、何ら建物跡などの遺構は検出されなかった。

加工段は、西側斜面では北寄りに4段以上あり、南側では中断するが、西北の支稜へは連続している。南側斜面には4段あり、東側斜面には3段確認される。

3. 小結

以上が調査の概要であるが、ほぼ全ての斜面に多数の加工段を設けているのが特徴である。満願寺城の中心となる主郭（現在の満願寺本堂の西側真裏）から西方へかなり離れているせいか遺構もほとんど無く、目視による縄張りの配置図の作成に重点を置いたため、尾根上の平坦地を中心に面的な本格調査に至らなかったのは残念である。

（注1）享保二年（1717）松江藩儒臣黒澤長尚^{ながひさ}が編纂した松江藩の地誌



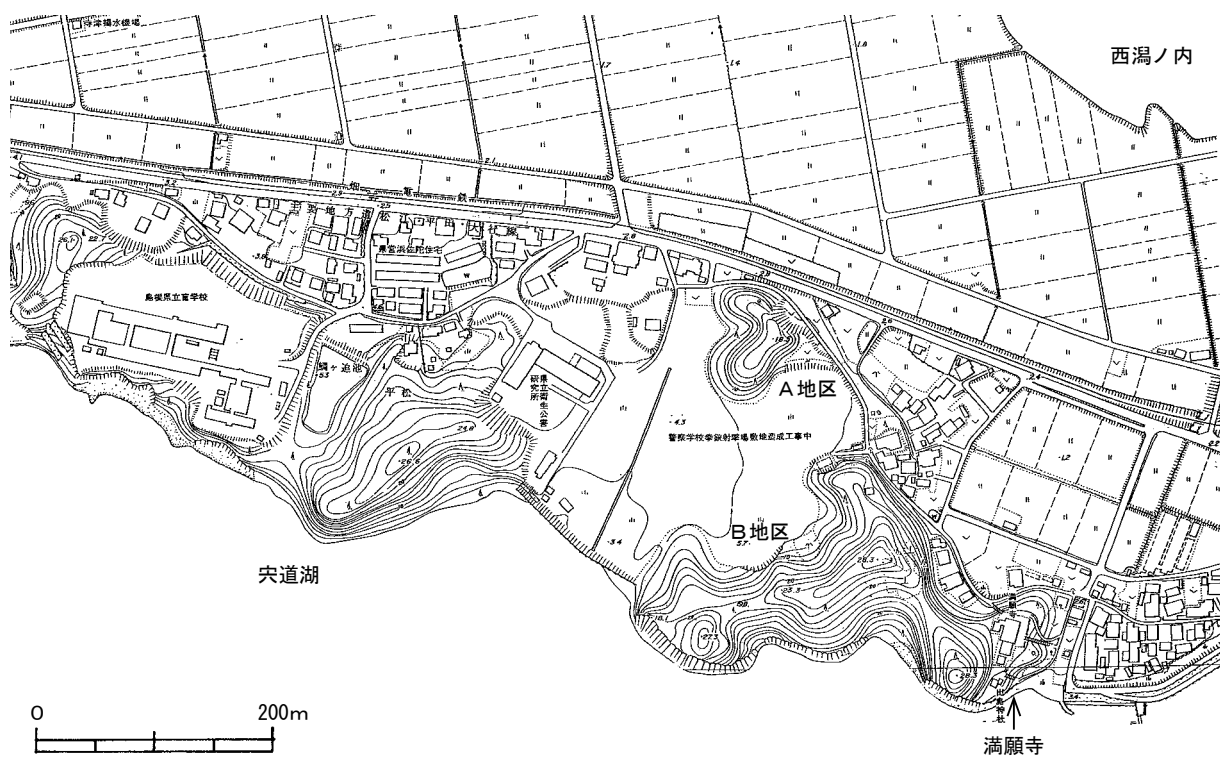
第1図 調査地位置図

- | | |
|---------------|---------|
| 1. 満願寺城跡（調査地） | 4. 白鹿城跡 |
| 2. 荒隈城跡 | 5. 真山城跡 |
| 3. 末次城跡（松江城跡） | |

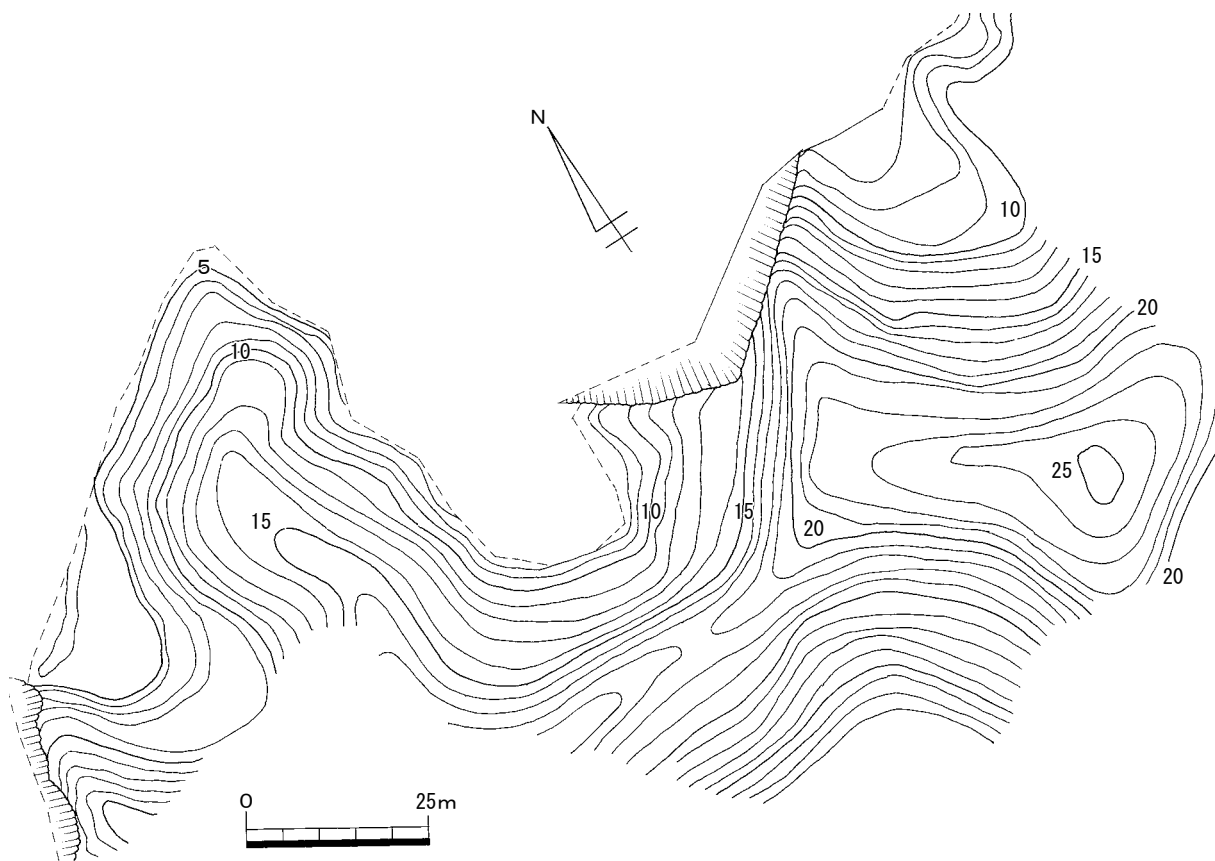




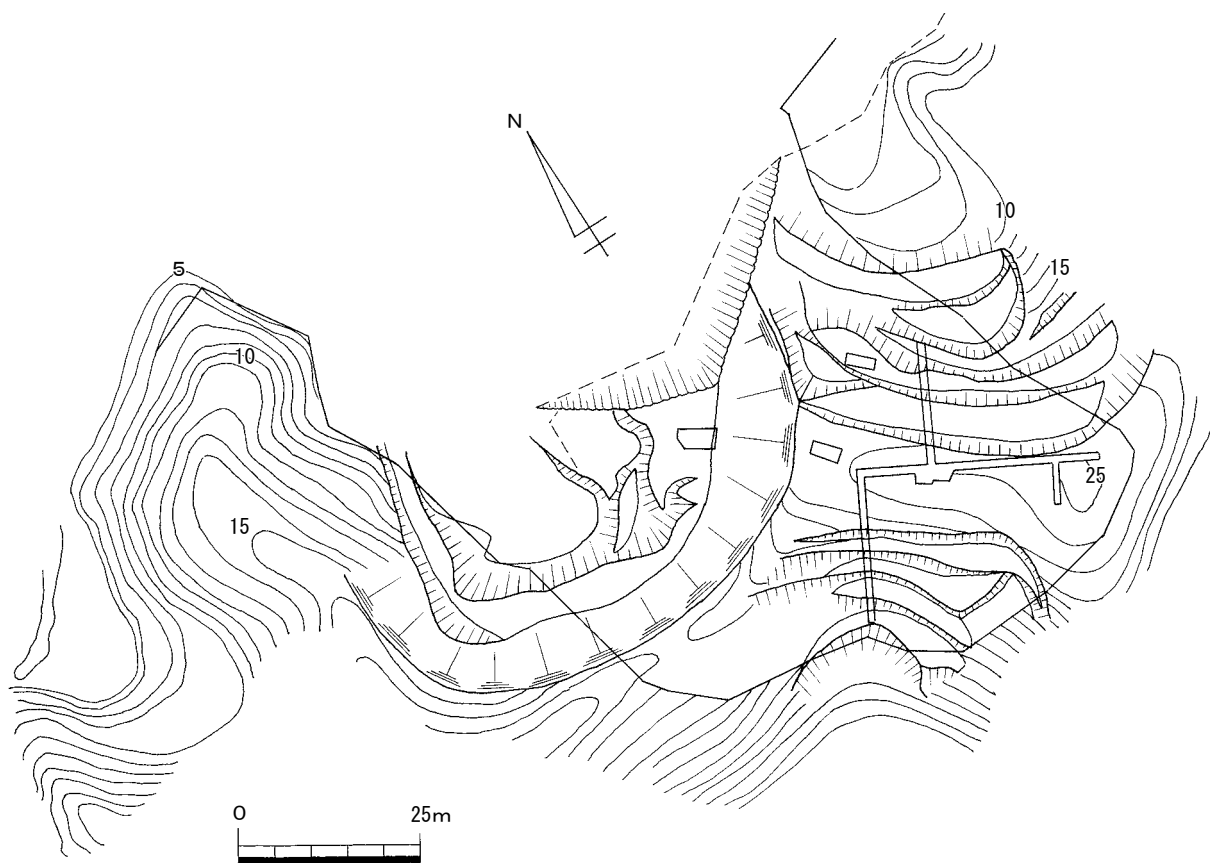
満願寺城跡遠景
(東方荒隈城跡・南平台団地穴道湖端から見る)



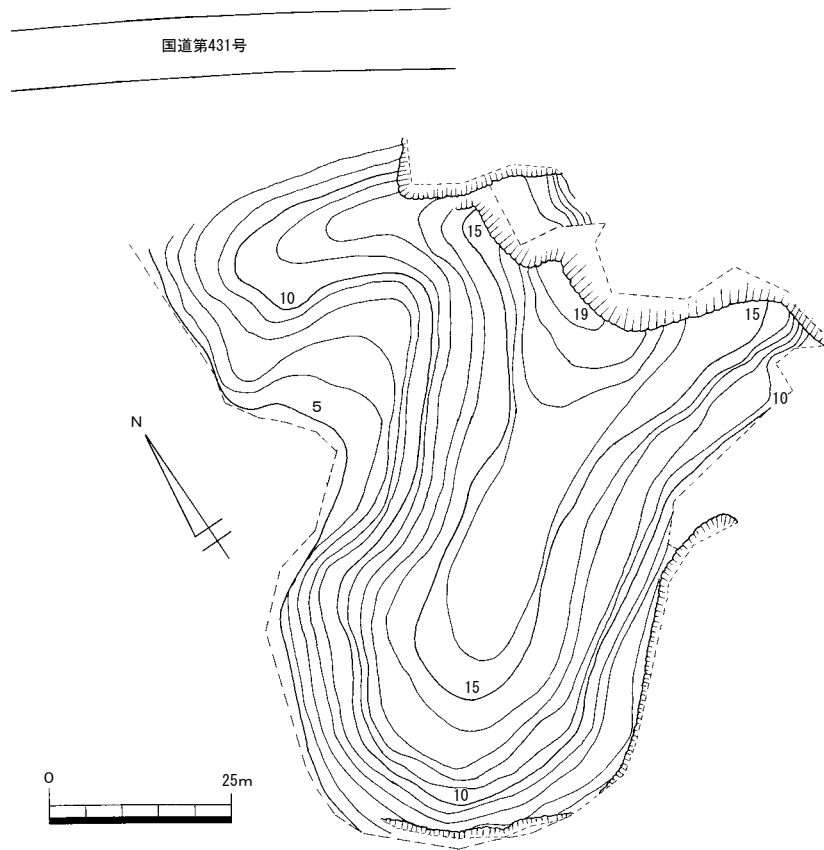
第2図 満願寺城跡周辺図



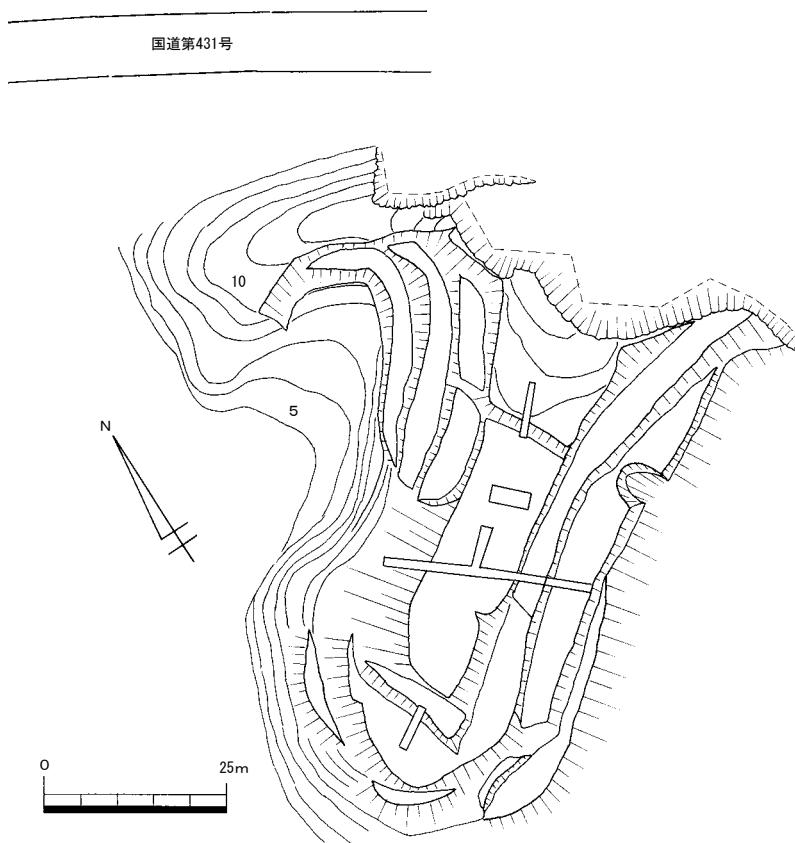
第3図 満願寺城跡A区地形測量平面図（数字は標高）



第4図 満願寺城跡A区トレンチ設定・遺構概略図



第5図 満願寺城跡B区地形測量平面図（数字は標高）



第6図 満願寺城跡B区トレンチ設定・遺構概略図



A地区トレンチ調査状況



A地区トレンチ調査状況



A地区礫検出状況



A地区ピット検出状況



B地区トレンチ調査状況



B地区トレンチ調査状況